

若い人



コンパクト・ブックス

若い人

一九六六年九月二十日 初版印刷
一九六六年九月二十五日 初版発行

定価二九〇円

著者 石坂洋次郎

発行者 陶山巖

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話 東京(265)六一一一

振替 東京一五六五三

印刷所 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印
を廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1966

人 い 若

石坂洋次郎



コンパクト・ブックス

集英社

若い人

間崎が勤めている女学校は米国系のキリスト教会で経営している自由博愛主義標榜のミッシェンスクールであるが、基金が豊かであることと、創設以来の学長であるミス・ケートの磊落な氣象とのお陰で、宗教学校にありがちな偏った冷たい空気もなければ、それが崩れてルーズな下卑た氣風に墮することもなく、五百余人の發育盛りの女生徒たちは、やはりミス・ケートの考案になる簡素な通学服を短く着込んで、芝生と花壇の多い学園の生活をのびのびと楽しんでいるようにみえた。

ミス・ケートは北米モンタナ州の鉱山街ビューートの産、本年五十六歳、長い握柄（にぎりょう）のついた鼻眼鏡を首に吊し、小丘のように盛りあがった胸の上に籠手を組み合せたような腕組をつくって、始業前、昼休、放課後の三回、学校の内外を隈なく巡視するほかは、たいてい学長室に納まって読書や事務に専念している。毎月曜の第一時限に会堂で全校生徒に修身講話をするのが決ったお役目で、そのほか、月に一ぺんくらいは割合で各学年に臨時の時間を設けさせ、思索や読書や——規律正しい日常生活の間に蓄積された感想を、美しい流暢な言葉で生徒の胸に伝達する。間崎も一度自分の受持っている四年B

組の臨時授業を參觀させてもらったことがあるが、信念の是非は別問題として、話したい内心の要求があつて教壇に立つのだから、熱意のこもった立派な修身授業であつた。人を威圧する風貌、一抹の暗影もない健康な精神、それらに適度な潤いを与える深い教養、これがやわらかい感受性をもつ生徒たちをひきつけ、有形無形に学校の氣風をつくりあげて行く大きな底力となつてゐることは、無神論者の間崎といえど日ごろ敬服してゐるところであつた。

ミス・ケートの訓育方針は「少い規則を確実に守らせる」と言うことで、すなわち、時間、服装、宗教上の儀式、この三項目については特に厳格な取締りを設けてその徹底を期し、したがつて生徒も小氣味いいほどそれらの訓練を経ていたが、そのいっぽう、学校維持費の大半を外国から仰いでゐる強みがあるので、監督官庁からときどき指図される訓育施設に関する告達はたいてい握り潰しにして、生徒に自由な空気を呼吸させるように計つてゐた。

部下の職員に要求するところも、教授法や学級管理法などの形式ばつた項目は口にもほせず、徹頭徹尾、生徒を個別に理解せよと言うことに重点を置き、彼女自身、わずかな臨時授業に出席するだけで、全校生徒の顔

と名前をくつつけてよく記憶している点では、毎日授業に出る職員の誰もが及ばないほどであった。

間崎はミス・ケートの信念を教育的に正しいものと思つた。個性助長とか個別指導とか言う概念は教育界の流行語となつていたが、それをほんとに生かして行くためには百の議論よりも一の信念を必要とする。ミス・ケートにはそれがあつた。もちろん、学校は多数を教育する機関である以上、個性尊重の立場に溺れて、生々しい性格の林の中に踏み迷い、全体としての正しい方向を見失うような結果に対しては警戒をしなければならぬが、多すぎる生徒と少な過ぎる職員との比率は、実際的にはそんな危険があり得ないことを明らかに示していた。

間崎は自分の勤めに喜びを感じた。赴任当初は、年ごろの女生徒に接するのが面はゆくてならなかつたが、二年余も経つた今日では、自分の知識や感情を適度にバラフリーズして、繊細な感度をもつ少女たちの精神を明るく淡泊な色調に塗りあげていくことに静かな愉悅を感じるほどのゆとりを持つことができた。

間崎は自分が若い男性であるゆえに無条件に生徒たちから好意を寄せられていることを知っていたが、それを濫用し、それに溺れることさえ慎めば、与えられたハンデキャップは女生徒を指導する上に得難い天与の一資格

であることを純粋に信じていた。素朴な性の牽引は父と娘の關係においてさえ白極光のように美しい。溺れることとともに、人生を華やかな曲線で執縛するこの牽引力を反動的に冷却させることをも深く恥じよ。

六月のある金曜日の午後、間崎は、「悪魔の室」と諧謔的に呼ばれている喫煙室に籠つて、五年級の作文に朱筆を加えていた。それは天井ばかりがむやみに高い一間半に二間の穴蔵を思わせるような室で、中央に古びた長テーブル、それを囲む四五脚の椅子のほかには花も額もない殺風景な場所だつた。

南向きの窓からさしこむ陽はテーブルの面を半分だけ明るく照らしていた。使用中は、煙草の煙が廊下に流れ出るのを防ぐためにドアの開放を厳禁してあるので、ただでさえ窮屈な室の中は蒸されるような暑さだつた。生徒たちは正午から郊外散歩に出かけて留守だつた。校舎の中は森閑とひそまって、裏の松林で鳴く油蟬が、濁つた余韻のない響を乾燥した空中にベルトのように吐き出していた。

間崎は、じっとり汗ばんでやけに煙草を吸いながら、一枚一枚、味気なく仕事を片づけていった。同一課題の未熟な文章を百五十名分も調べあげなければならぬのだから、一般に作文と言う学科は教師の側にはあまり欲

迎されないものになっているが、間崎の経験によると、

この学科は、教授者の課題の選び方および課題解説の成功不成功によってそのときどきの成績の水準が著しく変動し、よくできた場合には他の学科にみられない潑刺とした面白味を感得することができる。なんと言うか、みずみずしい感情思索の万華鏡を覗くと言ったような楽しい満ち足りた気持ちなのだ。その反対もひどいが――。

間崎は何回目かの苦しい欠伸を洩らして、とうとうペンを捨てた。そして、疲れた涙の目を、たった一輪だけ窓の高さにヒョロ長く伸びた真紅の牡丹に注いで、自分の肉体と精神を漠然と憎悪する感情の中に沈んだ。甲の評点を与えられる文章が今まで読んだ分には一編も出てこない。課題は「雨が降る日の文章」と言うのだった。

ジトジト降りつづく長雨は私たちの魂にカビを生ぜしめる、夏の夕立は心の沐浴だ。朝の雨、夜の雨、子供の目から溢れ出る涙の雨、読んで雨の音を遠くつかしく耳の底に蘇らせる文章、雨をインクにして書いた文章……とていねいにこちらの狙いを説明して置いたのに、みんなほんとの雨降りの日を書いてしまった。妹とケンカした子、母に手伝ってお萩をこしらえた子、主婦の友を読んだ子、窓に凭れて讚美歌二百十六番を唄った子――。實はこちらにもあるが、要するに主題を把握する力がな

かったのだ。辛抱して五六編も読みつづけていくと、そのどれかに必ずあの「雨が降ります雨が降る、あそびに行きたし傘はなし……」と言う白秋の童謡が引用されてあるのには苦笑するほかない。五年生じゃないか。

間崎は仕事をきりあげてピアノを弾きに行こうと思っただが、疲れたときの愚図愚図した気持ちにひきずられて、結局またペンを拾いあげた。今度はたくさんの中からふだんに立派な文章を書く生徒のだけを選んで読むことにした。いつもはこんな仕事のやり方を自分に禁じてあるのだが――。結局は同じことだった。誇張した形容、浮きあがった叙述、こうなると巧詐は拙誠に如かずだ。間崎は最後に、その名前を思い出すとともに棘のようなものを胸に感ずる一人の生徒の文章を読んで、骨が折れるこの仕事をおしまいにしようと考えた。五年B組、江波恵子。

「雨が降る日の文章――私にだけ書けそんな気のする文題だ。考えることも読み返すことも要らない。私は黙って私の心にフツフツ浮きあがってくる水泡のようなものを紙の上に書き現わしさえすればいい。私がこんな文章を書く努めざるチャンピオンであることは私の幸か不幸かは誰も知らないし、どうでもいいことだ。

私には父がない。私がこの学校に差出した戸籍謄本に

はハツ私生児江波恵子と記してある。家事の徳永先生にいつか「私生児って何ですか」と尋ねしたら、しばらく考えられて「神様の祝福を受けずにこの世に生れ出た子供のことで」とたいへんむずかしいたいへん簡単なお答をなされた。徳永先生は私がその祝福に恵まれない身分であることをご存知なかったのかもしれない。もし知っておられたらミス・ケートがなされるように人差指で私の顔のまん中をゆびさして、「それは貴女のような方です」と答えられたにちがいない。そうすれば私生児って何のことだか私にもハッキリ納得できたのではないかしら。

キリストには父がない。マリヤは聖霊に感じておはらみになった。けれども私の母は……。母は若いときからたくさんのお友だちにたよって一家の生計を支えて来た。私の父と呼ばれるはずの人もそのお友だちの一人にちがいない。私の生命が、私の父である人が私の母を侮辱することによってこの世に送り出されたものであるとしても、私は神様を父にもつよりは人間の父をもつことを欲する。罪なき者石にてこの女をうて。私ほど母を愛し私ほど母を憎む者はない。母はそのことを知っている。母は今も美しい。けれども年をとって身体も顔も肥って来た。愛か憎か、私がつよくな生々しい感情の鞭

に打たれなければ、母はもうどうして生きていけばいいのかわからないほどに弱くなっている。

「お母さまは幸福だったことがあるの」

「わからない、何が幸福で何が不幸なのかお母さまには考える力がなくなったの、お母さまはお前が傍にいてくれなければこのままぼうとして気違いになるんじゃないかと思うわ。朝から晩まで誰にもわからない唄をうたっているような温順しい気違いにね。……そしたらお前はどうかするだろうね」

お酒を飲んでいた母はすぐに興奮して泣き出した。そして一年に一ベン遊びにくる外国汽船のキャプテンからもらった古い葡萄酒をもち出して私に飲ませてくれた。私がお酒のうま味をほんとに知ってることを母は気がつかないのだ。

「お母さまがそんなになったら——私だってお母さまみたいに独立で働いてお母さまを大切に養ってあげるわ。お母さまがお祖父さまにそうしてあげたように……」

私はその言葉の反応を痛いような気持ちで母の顔から盗みとろうとした。ああ、だけど、母はほんとに弱りきっている。

「そうねえ、お前はお母さま思いだから、私が唄きちがいになってもきっと親切に私の面倒みてくれるだろう。」

おつくりをすればお前だって十人並の美人だし結構一人で立って行けるよ。女が独立で働くのをかれこれ悪く言うのは世間の奥さまたちのひがみだと思ふよ。ねえ、ただお前は私みたいに肥らないように気をつけたがいい。梯子のあがりおりが苦しいし、ちよつとの物事に驚いて胸がドキンドキンするからね。田村さんの奥さまは毎朝冷水摩擦と体操をなさるんだとさ」

それが母の答えだった。私はまだまだ夢みる女に過ぎないらしい。それから、母も私もだんまりでお酒を飲んだ。暗い海から吹いてくる潮風が濡れタオルのように顔の火照りを冷やしてくれた。一匹の黄色い蛾が黒いテール面の面にじっとへばりついていた。母も私も気にかかって、見まいとするほどその不気味な生物に視線をひきつけられた。まだ見ぬ父のことが雖でつかれるように苦しく考えられてならない。

「お母さま、女の幸福って男のほうからでないといたばかりでできないものなの。女一人だけの幸福って世の中にはないもののかしら、……ほんとのことを教えてね」

「お前はときどき恐ろしい大人になるのね。学問したおかげだよ、きっと。お母さまにはお前のたずねることがわからないの。世間には私ほど男のお友だちをたくさん

もった人もないだろうし、また私ほどいつも一人ぼっちの女だった人もないだろうよ。そのくせ何が幸福で何が不幸だかをちつとも知らずに暮らしてしまった私なの。ずっと昔に、思い出せないの、夢だったかもしれないんだよ、お母さまにも幸福らしいものが近づいて来たことがあったんだけど、何だかその背中合せて血を流すような恐ろしいものが隠れていそうな気がして、臆病なお母さまは尻込みしてしまったの、後になってからも悔む心なんか起らなかった。ただもうああ恐ろしかった、よかったですと思っただけなの。私はきつとそのころから肥り出したに相違ない。

お前の学校の先生がおっしゃるようにもし天国と言うものがあって、そこで神様が「お前は生きていたときに何をしていた女だ」とたずねられたら「私はたくさんさんの男のお友だちに親切にしてあげました。私は誰をも欺きませんでした。一人のために一人をおとし入れるような罪深い行ないは致しませんでした。できない約束はどなたにもしたことがありません。私はみな様に公平に親切をつくしました。そうすることが私の生れつきに協つていたのでございます。だからどなたも私のために争ったり私のために不幸に陥った方はございません」そう言うって答えようと思うの。そのとおりなんだからね。だけ

どたった一つ神様に叱られるんじゃないかと思うことがある。それはね、ときどき一人ぼっちでお室にいるとわけもなしに泣き出してしまうことがあるのよ。なぜ泣くんだから、泣くわけなんか少しもないのに涙がとめどなしに溢れて来て、しまいには声をたてて泣き出さずにはいられなくなるの、身体がこんなに慄えてね。どうしようもない。だけど理由もなしに泣くなんてきつといけないうことだと思わ。ねえ、お前の考えはどう？　なんだかお母さまには、お母さまが生れない前にお母さまが大人になってから泣かずにいられなくなるような原因がつくられておったような気がするの。そんなことなら誰にもわかりゃしない。ねえ、お母さまはいけない女？」

「知らない。……お母さま好きよ」

それが母の姿だった。感覚と理性を白濁した血の流れの中に喪失してしまつた原始の女。哀れな母。憎い母。私は女学校の二年生になるまで母に抱かれて寝た。母の濡い手が私のお尻を撫でまわした。母が唇を噛んで泣くのも眠ったふりで知っていた。私の知らない理由で母が泣かなければならないということがどんなに口惜しく悲しかったかを私は今も忘れない。私の母の悲しみの彼方にぼんやり「男」を考えた。今も変らない。けれどもまた母と抱き合っているいろいろなお話をするのはこの上ない

私たちだけの楽しみでもあった。ある夜の寝物語に、私は母から女の身体秘密についてきかされた。眠れなかった。涙が出た。けれども翌朝までには私は女に生れたことに深い意地悪な喜びを感じていた。私はこの喜びを誰にもけどられまいと自分に誓った。私がそうした女であることをハッキリ自覚したとき、女に生れたことの喜びがいっそう深刻なものになった……

「お前の指、すっかりもう一人前の女だね。お母さまの指環そっくりお前にあげよう。きつとよくうつるよ。……お母さまは自分が嫌いじゃない。ないけどお前はお母さまとちがつているほうがいい。私たちがこんなに仲好しでいられるのも、私たちの氣立がひどくちがつているからだと思ふの。もしお前がお母さまに似てくればお母さまはもう要らないお母さまになるわけだから、お室をきれいに飾って、お化粧もして、静かに死んでいくわ、ヴェロナールのんで。お前止めやしないね。お前の腕の中に抱いて……」

「ええ、止めやしない。そんな日、だけどくるかしら？　来ても来なくても私たち後悔なんかしないと思うけど。

……お母さま」

「はい」

「好きなの」

「お前お母さまの姉さんみたいだね、自分でそんな気がしない？」

「するわ」

うつろに答えた。母は私の指を幾度も唇に当てた。

母にたつた一ぺん訪れた幸福——それが私の父だった、なんて考える権利は私にない。そんな理想主義は三文小説のハッピーエンドにしかならない。世間の物事はその逆をいく。私の暗い生甲斐もそこに見出されるのだ。私は男を知りたい。その男をとおして私の父を感じたい。父の肌を、父の血の匂いを、父の口臭を、父の欲情を——そうすれば私は神の祝福に恵まれない一人の私生児がなぜこの世に生れ出たかを正しく知ることができるだろう。

母はテーブルにうち伏してうたた寝している。慢性疲労でこのごろは他愛なく眠る。私は窓縁に椅子をよせてひたすらに暗い夜の海を眺めた。海鳴をきいた。あの音の中にいっさいの秘密がかくされていそうな気がする。父、現われ出でよ！

結論にきた。気どりの私は、真理探求に血を流す一使徒としての私を考える。私が処女でなくなる黒い一線がひかれる日は案外近いのかもしれない。私の名はハツ私生児江波恵子！

先生、私のわがままなデッサンです。少しはすかしい

んですけど、でも書きたかったものですから」

原稿紙五枚にワクを無視した達筆な走り書で認めてあった。間崎は烈しい衝動に打たれた。彼は彼だけに示されたかくも生々しい心の記憶を、女はもちろん男の友人からさえ与えられたことがなかった。お下げ髪、水兵服——そのポケットにチョコレートをしのばせた小娘の中にこんな生活があらうとは！ 間崎は二度繰り返して読んでから、刺激された感情の方向に彼の「評」を走り書きした。

「私が要求したものは雨が降る日の文章だったのに、貴女は嵐の日を書きあげた。それはすでに書かれてしまったのだ。私は私が教師であるだけの理由で、かくも苦悩に満たされた懺悔を私の生徒に強いる権利があらうとは思わない。いや、これは私の外交辞令だ。ありのままに言うとは貴女は豚に真珠を与えたことになろう。私の役目は生徒と言う概念を指導することにあつて個々の魂には関りがない。結局ない。私は白い手の鋳物師だ。型つくりだ。それ以外のものであつてはならない。この薄弱な犬儒主義は私もまた若いと言う理由でともかくも許容されなければならぬ。でないと私は貴女や彼女や彼女ダッシュの息づまるような心の花園の匂いの中に窒息滅亡を余儀なくせしめられるであらうから。それは私と貴女

と、私と彼女との情死を意味する。私たちはミス・ケートの心臓を擁護するためにも当分臆病者の名に甘んじようではないか。私は多くを言いすぎた。『吠ゆる犬は強からず』

以下二三の評を書く。江波恵子は自分を強いと信じている弱い少女だ。彼女の眼はかつて多くの封建婦人が犯されていたつましやかな色盲症を患っている。それは、微細な陰影を捕えるには敏感だが肝腎の光はことごとく逸してしまう哀れな不具の網膜だ。現実とは自己の対立的存在ではない。自己の積極的意力が時間と空間に働きかけた場合にのみわれわれの現実が誕生するものであり、江波がみたものは遠い昔に死滅した月世界の観念的な現実に過ぎぬ。それがいかに美しかろうと、その美は結局博物館に保管さるべきものなのだ。

江波の第二の誤謬は自分の幸不幸をこの冷却した客観世界に依拠せしめていることにある。それは古風な運命論であり。君はその中で自らを瀕死の白鳥に譬えて悲哀の酒に酔い痴れようとしている。与えられる号令は廻れ右！だ。そして君は一兵卒の四角い素朴な意識をもって君の人生を踏みなおさなければならぬ。妄評多罪」

間崎は一気にその評文を書いてしまった後、寂しい濁った気持ちにさせられた。人中で調子に乗って喋り過ぎ

たり、嘘を吐いたりしたときに感ずる淡い舌触りな気持ち。たぶん彼は評文の中に空疎な美辞麗句を織り込んだものに相違ない。だが、いつの場合でも、そんな風の虚偽は、そのとき偶然に語られたものではなく、彼の心にそれを醸す不純な滓渣が沈澱している事実を裏書きするものだから、自分の未熟を鞭うつとともにその滓渣を根絶やしする意味で、一度口外した言葉はなるべく引っ込めないことに決めていた。今度も彼は街風に満ちた彼の即興的な批評を一字も訂正しまいと意固地に決心した。

——間崎は赴任後まもなく江波恵子の名を知った。職員室の話題にのぼる江波は、ひどいわがまま者で、よく学用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもってくる、寄宿生であるにもかかわらず遅刻早引が多い、教師に理屈を言う、そのくせ頭は素晴らしくいい、と言った風な、教師の側からはもっとも扱いがたい生徒の一人であった。間崎はそうした噂を聞き、またときどき訓育係の先生に呼び出されてお叱言を食っている、大柄な、美貌の本人を見知ってからも、特別な関心をもつことはなかったが、ふとした機会で江波との間に個人的な交渉が生じて以来、疲れたとき、寂しいとき、江波の姿が雲のように心をかげらすのに気づいて顔を赤くすることがしばしばあった。恋愛だとは思わない。絵でも文学でも人間でも、

頽廢的なものに心を引かれる自分の傾向を間崎は平素から極力警戒していたし、江波に対する関心も、他の生徒にみられない成熟した一つの性格に対する興味にすぎないものだと思っていた。

七月半ばのある日、彼は時間が空いていたので、雑誌をもって裏山へ寝転びに行った。熊笹の間の小逕を通っていつもの丘のぼり、一本松の下の窪地に腰をおろして、眩しく光る海を眺めおろしていると、ふと間近で口笛の音が聞こえた。ふり向くと彼から三間と離れてない別の窪地に、江波恵子が、両手を頭の下にあてて、あけひろげな形でのびのびと寝ころんでいた。胸に赤い表紙の本をのせ、眼をつぶって口笛を吹いている。間崎は驚くとともに、江波の地面に委せきったような姿態に反射的な恥ずかしさを覚えた。彼は近づいて声をかけた。

「どうしたんだ、江波さん」

「とうとうみつかったわ、足音が聞こえたとき先生かもしれないと思いましたの」

江波は起きあがって彼の顔を見あげ、悪戯を企てた子供のようにおもしろそうに笑った。こうして見るとほんの無邪気な少女の顔でしかない。

「頭が痛いからこの時間だけ先生に休ませていただきますの」

「君はわがままがとおっていいんだね。何の本だ……」
間崎はぶっきら棒に言って江波の傍に腰をおろした。空も海も青く晴れ渡って誰とでも仲よくできるすがすがしい気持ちだった。本はフランスの訳詩集だった。

「先生おあがりになる……」

ポケットから銀紙に包んだチョコレートをつかみ出した。

「いろんなものを持っているんだな。いadakou」

ゆっくり包紙をむいて黒い塊を口に入れた。同じ甘さが二人の舌の上で溶けるのが感じられた。間崎は豊かに肉づいた白い艶のいい横顔をこだわりなくじっと眺めおろした。チョコレートを含んでポツンとふくれた頬だけ見えていても、眺め飽きない清らかな美しさが溢れ出ている。江波は、片方の耳に重く被さった髪の毛を、グイと頭を強く振って払い除け、それとともに間崎の顔を見つめた。自然の微笑が目の片隅から湧いた。

「君はこうしていると素直な人なんだがね。何だっときどきあんな桁はずれなことをやって職員室に呼び出されるんだかなあ」

「私にもわからないんです。温順しい私と悪い心をもった私とが身体の中に別々に住んでいて、私はそのどちらかの奴隷にさせられてしまうんです。温順しいほうの私